◆書　評◆

宮永健太郎（2023）『持続可能な発展の話 ―「みんなのもの」の経済学―』岩波新書

嶋　田　大　作（龍谷大学）

はじめに

本書は，環境問題を初めて学ぶ人に向けて書かれた「概説書」である．直ぐに役立つ実用的な知識が体系的に解説されているというよりは，いわば答えの出ない問いについて考えるきっかけを読者に与える本だと言える．本書のすべての章のタイトルは，刺激的な疑問形で提示されている．例えば，「はじめに」では，「SDGsは一般常識？ただの流行り？」となっている．関心を引きそうな問いを投げかけ，読者に考えることを促しているようだ．続いて，そうした問いについて考えるための概念が，読者に語りかけるような平易な文体で説明される．

最近，環境問題を学ぶ際に特によく耳にする言葉がSDGs（Sustainable Development Goals）だ．評者が勤務する龍谷大学では，SDGsが掲げる理念と仏教の教えに共通点を見出し，「仏教SDGs」が提唱されている．また，所属する農学部でも，SDGsが学べるプログラムを用意している．話がやや脱線したが，今やSDGsという言葉は，広く知られる言葉となり，多くの組織で推進されている．他方，SDGsブームとも言えるこのような状況に冷ややかな視線を送る人々もいる．組織のイメージアップのためだけにSDGsの看板を掲げ，内実を伴わない状況を批判する「SDGsウォッシュ」という言葉も聞かれる．著者の言葉を借りれば，SDGsの推進に熱心に取り組む「熱狂派」と，それに対して冷ややかな反応を見せる「冷笑派」が生まれている．このように両者が対立する状況を受けて，SDGsの核心をなす持続可能な発展（Sustainable Development）という考え方に立ち返ろう，と著者は呼びかけている．それは，本書のタイトルに端的に表れている．そして，この持続可能な発展をテーマに本書で展開される話題は多岐にわたる．次にその内容を見ていくことにしたい．

本書の構成と内容

本書は，持続可能な発展や環境ガバナンスといった本書全体に関する基本概念を扱う1～2章と，各論的に個別の環境問題を取り上げる3～6章で構成されている．

第1章「人間が死ぬ理由は環境破壊？経済の停滞？」では，本書の核となる持続可能な発展の概念が議論される．まず，環境とは人間の生存基盤であり，環境を守るのは，人間が生きるためだという本書の基本的なスタンスが示される．そのうえで，今日のSDGsの議論につながる持続可能な発展の概念がどのように誕生したのか，経済成長との関係はどうなっているのか，といった議論が経済学の知見を用いながら展開される．

持続可能な発展の定義として，現在も広く受け入れられている定義は，1987年にブルントラント委員会の報告書で提示された「将来世代のニーズを充足する能力を損なうことなく，現在世代のニーズを満たすこと」である．このブルントラント委員会の定義をベースに，本章では「包括的富を維持しながら経済活動を行うこと」という定義が示される．包括的富とは，工場設備や道路，港湾といった人工資本に，労働者に備わった技能や知識といった人的資本，さらに自然資本などを足し合わせたものであり，この包括的富を維持できれば，「将来世代のニーズを充足する能

力を損なうことがない」ため，上記のように定式化できると説明している．

ブルントラント委員会の報告書以降，持続可能な発展の定義を巡って，新古典派経済学やエコロジー経済学など，様々な学派の間で非常に活発な議論が行われてきた．どのような立場から，誰がどのような主張を行ってきたのか，もう少し踏み込んだ議論を展開しても良かったのではないだろうか．本書の主要なメッセージである，改めて持続可能な発展に立ち返って考えよう，には強い共感を覚えただけに，尚更そう思われる．

本章のまとめとなる第4節のサブタイトルには，「経済成長はGDPで測る．では持続可能な発展は何で測る？」という文字が躍っている．この問いかけを見ると「環境問題を初めて学ぶ」読者には，GDPの様に確立され広く普及した指標が存在すると思う人もいるのではないだろうか．包括的富指標など有力な指標は出てきているが，決定版として広く普及している状況ではないというのが評者の理解だ．そうした点が，本書では明示されていないので，明確な答えがあると思った読者は迷子になるのではないか．優しい文体とは裏腹に，読者に要求される水準はとても高度である．授業などで活用する場合は，教員側の工夫が必要になると思われる．

第2章「それぞれが頑張れば問題は解決？」では，SDGsの達成方法を考えるための概念としてコモンズと環境ガバナンスが議論される．環境は，個人や企業だけのものでもなく，また政府のものでもない．「みんなのもの」である．「みんなのもの」は，「みんながバラバラに頑張るだけでは解決できない」ので，みんなで協力して取り組むことが必要だというのが本章の主要なメッセージである．これは，本書の副題にもなっており，本書を貫くテーマだと言える．みんなのものを協力して守っていくためにはどのような仕組みが必要か，そうした問題にこれまで取り組んできたコモンズ論や環境ガバナンス論の知見が紹介されている．

第3章「日本はリサイクル先進国だから大丈夫？」では，ごみ問題とごみと表裏一体の関係にある資源問題が扱われる．耳慣れないカタカナ語が多用される章ではあるが，要点は，ごみや資源の問題を「みんなのもの」として捉えることで，解決を図ろうということである．具体的な主張を一つ取り上げると，コモンズ論を援用しながら，シェアリングエコノミー（共有経済）によってサーキュラーエコノミー（循環経済）を実現しようというものがある．自動車や家電のような耐久消費財は，実際に使われている時間よりも家で使われずに眠っている時間のほうが長いのだから，個々に購入して所有するよりも，みんなで共有したほうが，資源の節約になるという考え方だ．インターネットやデジタル技術の発達により，容易に貸し手と借り手を結びつけることが可能なシェアリングプラットフォームが誕生しているという．コモンズの研究に従事してきた評者には，魅力的に感じられる部分と共に，やや楽観的ではないかと思われる部分があったので，後のコメントの節で言及したい．

第4章「日本よりも中国・アメリカが頑張るべき？」では，地球温暖化問題が議論される．ここでもやはり「みんなのもの」という視点が導入されるが，ここでの「みんな」は全地球レベルとなる．第5章「人の命と生き物の命，どちらが大切？」では，生物多様性の問題が議論される．そして，最後の第6章「上下水道とダムさえあればもう安心？」では，水資源・環境問題が取り上げられ，本書は結ばれる．

いくつかのコメント

既にコメントらしきことを述べてしまっている部分もあったが，最後に3点ほど意見を述べたい．

まず，SDGsを巡る議論に対して，持続可能な発展に立ち返ろうという著者の意見には，評者もまったく同感である．ただ，その結果何が見えてきたのかは，本書では明示されていないように思えた．総論から具体的な各論に入り，そのまま本書は終わっている．

持続可能な発展の概念に立ち返って様々な環境問題を検討した結果，そこからSDGsの「熱狂派」と「冷笑派」の対立に何が言えるのか，SDGsで示される17のゴールと持続可能な発展概念の関係はどのようなものなのか．こうした点について，著者の見解を示して欲しかった．

2つ目は，すでに言及したコモンズとシェアリングエコノミーに関するものだ．コモンズとは元々，ため池や水利施設，入会林野の様に，農村社会において集落の共的資源として管理・利用されてきた資源およびその管理制度を指す言葉である．個々人で所有するのには向かない資源であるため，人々が自治的にルールを作り，「みんなのもの」として管理してきた．集落での長年にわたる関係の中で，人々の間には信頼や互酬性が培われ，またそれを強固にするために祭りや各種の行事が行われてきた．その結果，「みんなのもの」が守られてきたのである．当然，失敗するコモンズもある．そのため，どのような条件の下で，資源の持続的な管理・利用が可能になるのか，研究が重ねられてきた．

本書によると，シェアリングエコノミーは，これまで個人所有されてきた自動車や家電といった耐久消費財等を共有しようという考え方であり，「都市部向きのビジネスモデル」だという．上で述べたようなコモンズの仕組みが，「シェアリングプラットフォーム」と呼ばれるインターネットとデジタル技術によってつながった人々にも働くのだろうか．むしろ「自分のものではない」からと言って，ぞんざいに扱うことはないだろうか．誰が維持管理の費用を負担するのだろうか．人々の信頼関係はどう構築されるのだろうか．今後，コモンズ研究の成果を踏まえながらも，議論すべき点は多く残されていると思われる．

最後は，専門家ならではの議論の深みに関するコメントだ．新書の魅力は，ある分野を極めた研究者・専門家が，その分野の内容を分かりやすく誰にでも読める形で説くことであろう．分かりやすい文章の中にも奥深い味わいがある．本書の著者は，環境NPOの研究から出発し，環境ガバナンスへと研究領域を広げ，成果を積み重ねてきた研究者である．本書を最初に手に取った際には，本書全体をそのような著者の専門家としての視点が貫いていることを期待したが，著者の力点はそこには置かれていなかったようだ．例えば第1章では，経済成長の指標としてのGDPの問題点が議論されるが，ボランティア・NPO活動のどういった部分がGDPとして捕捉され，また何が捕捉されないのか，そういった視点から説き起こしても良かったのではないだろうか．おそらく著者は，このような意見があることは百も承知の上で，本書の書き方を選択したのだろう．著者自らが，「はじめに」で，本書を「概説書」だと位置づけていることからもそのことはわかる．ここ最近の学術研究が細分化・専門化・分業化の流れにあることを批判的にとらえ，「諸分野の基本的な知見を幅広く見通せるように書く」ためにあえて，網羅的に様々なテーマを取り上げたと述べられている．そこに本書の特徴があると言えるだろう．

以上で述べてきたように，本書は環境問題の初学者に向けて書かれた本だと著者は位置づけているが，同時に，SDGsを熱心に推進している当事者にも，また，それに懐疑的な立場を取る人にも，もう一度，根本的な問題に立ち返って考えるきっかけを与えてくれる本だとも言えるだろう．本書が多くの人の手に取られ，議論が広がることを期待したい．